

## 松葉礼子\* : 第17回日本植生史学会談話会エクスカージョン報告

Reiko Matsuba\*: Excursion of the 17th Meeting of the Japanese Association of Historical Botany

第17回日本植生史学会談話会エクスカージョンが、1999年5月15, 16日に青森県青森市三内丸山遺跡と大矢沢野田で行われた。15日には三内丸山遺跡体験学習館において三内丸山遺跡の見学と報告が行われ、翌16日は大矢沢野田の見学会が行われた。参加者は計46名であった。

15日は、天候にも恵まれたため、時間の大部分を三内丸山遺跡の現地見学に費やした。辻誠一郎氏(国立歴史民俗博物館)により、自然科学分析の調査ポイントとなったエリアや当時の調査状況が説明された。その後、現在行われている景観復元の取り組みや進行中の発掘調査、埋め戻された遺跡の保存状況について説明を受けた。当時の調査状況もさることながら、こうした遺跡復元への取り組みも興味深かった。具体的には、遺構面を傷つけずに植栽を行うための盛土厚の実験や、埋め戻された未発掘面の保護の現状とその後の水環境の監視、遺跡保存運動で植栽されたマロニエの問題などが紹介された。一口に遺跡の保存・復元と言われても、それを実行する際に生じる現実的な問題については部外者に分からない面も多く、大変参考になった。

その後、復元住居などを各自見学の後、学習館内において引き続き辻誠一郎氏による三内丸山遺跡の調査概要紹介と、翌日に予定されている大矢沢野田の概要と現況の報告があった。調査報告として、後藤香奈子氏(国立歴史民俗博物館)が「青森平野南部の完新世植生史」を、木村勝彦氏(福島大学)が「青森市大矢沢野田における埋没林の年輪年代学的研究」を報告した。後藤氏の報告では、三内丸山遺跡におけるクリ林の人為的な拡大とその後生じるトチノキの増加、および大矢沢野田における

クリとウルシ属の人為的な拡大が指摘され、比較的近距離にもかかわらず2地点間で構成種などに違いが見られることが紹介された。木村氏は、大矢沢野田で発見された八戸火砕流直下の埋没林の年輪年代測定結果やその結果から想定される当時の森林状況について報告した。過去の森林の群集動態復元を目的としたアプローチは、更新の様子や



図1 第17回日本植生史学会談話会エクスカージョンにおける大矢沢野田の巡見風景(写真提供:渡辺 歩)

個々の木材の埋没した当時の様相が具体的に、興味深い報告であった。

翌16日には、大矢沢野田遺跡の現地見学会が催された。前日に聞いていた概要から、規模の大きさは伺われたが、実際に見るとその規模の大きさにまず驚いた。前日に引き続き辻誠一郎氏により、「縄文の谷」の平面的な分布状況の説明があり、露頭と埋没林面を順番に案内された。歩いてみると、そこそこに露出した埋没樹木が点在し、少し掘りかえただけで球果などの植物化石が大量に顔をだし、これらから大部分が破壊されてしまった埋没林部分の規模が想定できるだけに発見が遅れたことが悔やまれた。

従来、過去の環境を明らかにする手段として、花粉分析、珪藻分析、種実同定、樹種同定、年輪年代測定など同定を中心とした方法が採られてきた。これらの分析方法自体は、意図した情報を引き出してくれるが、方法自体は確立してから現在まであまり変化はなく、近年は調査事例が増加するだけの様に感じられる。これだけの情報量を内包した露

頭を目前にすると、情報を引き出す手段がまだひじょうに限られているように感じられ、他にもっと情報が引き出せるのではないかとも思われる。辻氏も様々な方面からのアプローチを参加者に呼びかけていたが、今後これらの呼びかけが現実になることを期待する。

その後、各自興味のあるポイントにて、サンプリング等を行い解散となった。大矢沢野田では途中NHKの取材もあり、三内丸山遺跡では巡検中多くの見学者と出会うなど、遺跡や古環境といった分野への人々の興味の高さが伺われた。一方、注目が集まっている故に、理解不足から生じる問題と分析に対する過度の期待があるような気がしてならない。そのためにも研究者の正確な情報公開と地道な研究活動こそが、この分野のさらなる発展を促すものと考えられる。

(\* 〒335-0016 埼玉県戸田市下前1-13-22 株式会社パレオ・ラボ Paleo Lab Co. Ltd., Shimomae 1-13-22, Toda, Saitama 335-0016, Japan)

## 百原 新\*: 生態学関連メーリングリストの紹介 Arata Momohara\*: Mailing Lists for Plant Ecology

Eメールを利用して生態学関連の情報交換ができるメーリングリストを紹介する。

### JECONET

生態学の異なる分野に属する研究者が、生態学の様々なテーマについて議論や情報交換をリアルタイムで行うために1995年に発足した。現在の会員数は約1600名で、学生から社会人まで幅広い会員層によって、生態学全般にかかわる情報交換が行われている。現在の代表者は山本進一(名古屋大学)、管理者は伊藤宏樹(森林総合研究所)。入会すると、新しい研究方法や研究を進める上での質問や議論、解析ソフトや研究機材の情報や評価、新刊書の情報・書評、研究会の情報、公募情報などについての記事が1日5通ほど送られてくるが、環境問題や研究のあり方などの議論が白熱すると大量の記事が送られてくることもある。もちろん、投稿もできる。入会は無料。入会申し込みなど

詳細はホームページ <http://www05.u-page.so-net.ne.jp/da2/ito-hi/jeconet/jeconet1.html> を参照。

### ECOTOPICS

生態学およびその関連分野の学会誌、紀要、研究所報、商業誌、新刊書等の目次配信専用メーリングリストで、会員がこれらの目次を配信することで運営されている。代表・管理者は安田雅俊(森林総合研究所)。青山ブックセンターとの提携で、環境図書の最新情報も提供している。紹介される新刊の中には、著者割引で入手できる図書もある。入会無料。入会申し込みなど詳細はホームページ <http://member.nifty.ne.jp/ecotopics/index.html> を参照。  
(\* 〒271-8510 千葉県松戸市松戸648 千葉大学園芸学部 Faculty of Horticulture, Chiba University, Matsudo 648, Matsudo City, Chiba 271-8510, Japan)

### 査読者への謝辞

植生史研究第6巻に投稿された論文等は下記の方々に査読していただきました。記して御礼申し上げます。

守田 益宗	杉田 久志	高原 光	植村 和彦
能城 修一	鈴木 三男	鳥居 厚志	山田 昌久